

別になにか思い入れがある訳でもないし、かといって自暴自棄になっている訳でもない。したがってこの情景はある種の錯覚であり、ただ明日を見んとする者たちの古びた映写機の音なのだと。

乾いた冬の晴天に、重く太い銅の鐘の音が響き渡り、ぱたぱたと子供が上履きのゴム底を地面に叩きつける音が過ぎ去っていく。鉛筆で描かれた落書きや、運動場から駆け戻ってきたのであろう泥や砂が簀の上にざらついたままなのを見ると、この木造校舎が建ってから長い年月が経ったことを感じざるを得ない。ロッカー置き場には照明も満足に無く、吊られた裸電球は、時折開けっ放しの窓からの風に吹かれてゆらゆらと泳いでいた。

ずらり、とは言わないまでも、数十と並んだ全校生徒の靴を仕舞い込んだロッカー達。どうやら先程の鐘は1時間目の授業開始のものだったようで、辺りはしんと静まり返っている。

「ああ、また遅刻か」

ばん、と力無く錆かけたロッカーを叩く音。『かみたに あり』と書かれたシールが貼られている。肩を落とし、叩いた拳を開いてロッカーの扉を開けた。

「だから近道するのやめようって言ったのに」

次いで違う手はその隣の『かみたに まり』と書かれたロッカーを開ける。赤いランドセルが揺れ、慣れた手つきで土足から上履きに履き替えて扉を閉めてから、深いため息をついた。

「だって絶対間にあわなかったよ、いつもの道だと」

「有が欲張ってご飯おかわりとかするから遅れたんだよ」

「毬だって靴履くの遅かったじゃん！ 慣れてないのに意地張ってひも靴なんかにするからだよ」

「マジックテープなんて低学年が使うものだよ」

「私達まだ3年生なのに」

顔を見合わせ、にいと笑う。いつ見ても一卵性双生児で産まれた私達の顔は寸分違わず一緒、同級生や先生たちもどちらが有でどちらが毬か未だに分かっていないようであ

る。双子ならではの共通意識。他人に排他的な大きな大きな壁のような何か。自分達以外では誰も自分達を理解できないと思っているような目、心。そんな考えが、彼女たちの登校意欲を削ぎ続けていた。

のろのろと教室へ続く廊下を歩く。ランドセルにつけた給食袋が揺れ、理科室を通り過ぎたところで毬が口を開いた。

「そういえばさ、この学校無くなっちゃうんだってね」

「えーっ、じゃあ私達どうなっちゃうの？」

有の言葉に、毬は前を見たまま首を振る。

「さあ……。多分だけど、みんな家から一番近い学校に行くことになるんじゃないかな」

「バラバラになっちゃうのか……。あ、でもどうせ全部で23人しかこの学校にいないし、そんなに悲しむことでもないや」

どこか清々しい有の顔に、毬はそうだね、と頷きつつも一抹の不安を抱いていた。

毬より有の方が、まだ子供だ。そう、毬は思っていた。これから誕生日を迎えて大人になるにつれ、双子の共有意識や仲間意識、他者理解の無さはきっと生きていく上で致命的な枷になるだろう。いつも一緒、考えることもやることも一緒、お互いの行動全てが善と信じて疑わない——とても素晴らしいと思う。しかし、幼稚だ。変わらなければならない。考え方を。他人への理解を。社会への適合を。

「じゃあもう無理して学校来ることも無いね」

空き教室や特別教室などを見まわしながら呟く有。『学校』という箱庭が大層お気に召さないようである。それは、毬も同感だった。どうして通わなければいけないのか。どうして面白くもない授業を受けなければいけないのか。どうして面倒くさい宿題なんかをしなければならないのか。

「だいぶ古いしね、この学校。4階の図書室の前の廊下なんか、木が腐っちゃってて歩くたびにギシギシ鳴ってきもちわるい。夜とかに踏んだら誰かのうめき声みたいに思われちゃうかも」

『2の1・3の1・4の1』と書かれた立て札が吊られた教室の扉の前に立つ。古びた木の引き戸はわずかに隙間を残して閉じられており、中で授業をしている先生の声がくぐもって聞こえていた。

「……落ちたら死んじゃうのかな」

有が沈着に、冷静に、平然と、平静と、淡々と言葉を投げた。

「……」

毬は答えない。

「……いや別に。死んでも」

自嘲めいた諦めの言葉は、引き戸を開ける音にかき消された。

くだらなくて面白くも無い国語の授業を受けた後、先生からくだらない読書感想文という宿題を嫌々するために、私達は先程噂していたばかりの図書室へ向かった。相変わらず有はぶつくさ言っていたものの、本は好きなようで、図書室に着くなりランドセルを放り出して棚に刺さっている数々の本の背表紙を眺め始めた。毬はランドセルを机の上に置き、『小学生推薦図書』と書かれた本を適当に手にとって開き、あらすじを読んでは戻し、読んでは戻しを繰り返す。

しばらくして有は『人物でんき：エジソン』というなんだか変なおじさんが描かれた表紙の本を選んできた。毬は江戸川乱歩シリーズの一冊を借り、ランドセルに入れて廊下に出た。

「エジソンって電気の人だったっけ？そんなんで感想文書けるのー？」

「毬こそ江戸川乱歩って、なーんか大人ぶってるー」

けらけらと笑い、有が楽しそうに「けんけんぱ」をしながら無邪気に元来た廊下を歩く。

そんな有を見ながら、毬は思わず苦笑する。

「ちょっと、危ないよ、そこの床、今にも抜けそうなんだから——」

瞬間。

「え——」

傷んで脆くなっていた木の廊下は有の跳ねる重さに耐えきれず、ばき、みしみしと音を立てながら割れ、有を呑みこんでいく。

「有！」

駆けだすも間に合わず、有は踏み抜いた廊下の穴に消えた。

ガクガクと震えだす足を踏み出し、駆け寄って穴を覗きこむ。穴の下には、また穴。どうやら落下した先の3階の廊下も、衝撃を受け止めきれずそのままさらに貫通して落ちたのであろう——

2階分の高さからの落下。

「そんな……有……」

知らず涙が溢れてくる。どうしていいのかわからない状況、動けない足、見えない

有。なにも起こらなかったという事にはできないのだろうか。何もできないのだろうか。

私は、私は――

ぐっと目を閉じ、消えろ消えろと心で叫ぶ。下校時刻の鐘の音が校舎全体に鳴り響いて、

「ああ、また遅刻か」

次に目を開いた時には、ロッカー置き場だった。

重く太い銅の鐘の音。先程図書室前の廊下で聞いたものと、全く同じ音。

「……え？」

毬は今、ランドセルを背負って、土足のまま、その場所に立ちすくんでいる。

ばたん、と乱暴にロッカーを閉める音。閉められたロッカーには、『かみたに あり』と書かれたシールが貼られている――

「どうしたの、毬。ぼーとしちゃって」

顔を覗きこんでくるのは、さっき目の前で落下したはずの、有。神谷有その人が、毬の目の前に立って、心配そうにこちらを見ていた。

そんな馬鹿な。さっきまで、図書室にいたじゃないか。遅刻して教室に向かって、国語の授業を受けて、宿題が出て、図書室に行って、本を借りて、そして――有が落ちたではないか。

目の前で起こった事実、頭の中に残る事実と、今起きている事の整理がつかず、毬はその場から動けずにいた。

これがデジャヴ、というものなのだろうか。既視感……それは記憶している事柄に似たような事柄が起こった時、脳が勘違いをして「これが起こった事実を私は知っている」と錯覚する現象。それを今、私は体験しているのであろうか。

「なにしてんの毬。1時間目国語だよ。早く行こ」

有。何事も無かったかのように存在している。落ちた事実など無かったかのように。まるで同じ日を繰り返しているかのように。

啞然とする毬の横を素通りして、赤いランドセルは教室への道を歩き始める。条件反射のように、毬も慌ててその後を追うしかなかった。

そして、授業は難なくこなされ、宿題もきちんと出た。「本を読んで読書感想文を書きなさい」だ。全く同じ。先程と、寸分違わぬ『今日』が、もう一度やってくる――

偉人伝記：エジソンを選んだ有、跳ねる有、訝しげにそんな彼女を見つめていた。そんなまさか。同じ日が繰り返し起こるなんてありえない。これはなにかの間違いだ。夢を見ているに違いない。有は落ちない。落ちたらどうする？ 私はどうすればいい？ 何ができる？ 大丈夫だ、あれは夢だ。予知夢なんて、見るはずがない。

「ちょっと、危ないよ、そこの床、今にも抜けそうなんだから——」

言って、思わず口を押さえる。この言葉も、言った覚えがある。まさにさっき。さっき、有が落ちる前に発した言葉——

ばきん

「有！」

有は落ちた。現実的に、今、落ちた。先程と同じように、同じ格好で、同じ状況で、穴に呑み込まれていった。

「そんな…… あれは夢じゃ……」

頭の回転が、完全に停止する。

二度も、有が落ちる夢を見ているのだろうか。これも、夢なのだろうか。夢の中で夢を見ているなんて、なんてファンタジーなのだろう。だったらこれも夢のまた夢のまた夢なのではないだろうか。思考が混乱し、息が荒くなる。頭が痛い。叫びたくなる。重く太い銅の鐘の音が、校舎中に響き渡って——

「ああ、また遅刻か」

瞬きをして次に目を開けた時、またしても目の前はロッカーだった。全く同じ。3度目のロッカー置き場。乱暴に閉められるロッカーの音。『かみたに あり』。

私は、私は、気付いてしまった。幾度となく繰り返される『今日』の、からくり。

誰か魔法使いに襲われた訳でもなく、誰かに洗脳されているわけでもなく、これは物語でもなく、ただの現実と空想として処理されているのだと。

きっとまた、有は『今日も』落ちるだろう。明日も明後日も、これからもずっと、ずっと。

同じ『今日』を繰り返す。この空間……この学校はいつだって。

確かにこれは夢だ。間違いなく、繰り返し見ている、夢。でも、私が見ている夢じゃない。もちろん、有が見ている夢でもない。双子だからわかる。これは確実だ。

だとしたら、誰が見ている夢なのだろう。ずっと来ない明日を心待ちにするが故に、

『今日』に張り付けられてしまって動けない誰か。『今日』で時間が止まってしまったが故に、同じ事柄を繰り返し、夢を見続ける誰か。

もう何度繰り返しただろう。この、『今日』という日を。

私は、相変わらず1時間目の国語の授業へと向かうべく、有と肩を並べて歩く。そうして、いつも同じ言葉を、有に投げるのであった。

「そういえばさ、この学校、無くなっちゃうんだってね」